知覚はプロジェクションか？
——認知科学者のための知覚の哲学入門——
Is Perception Projection?
A Cognitive Scientist's Guide to Philosophy of Perception

呉羽 真*，小草 泰†，藤川 直也‡
Makoto Kureha, Yasushi Ogusa, Naoya Fujikawa
*大阪大学，†慶應義塾大学，‡東京大学
Osaka University, Keio University, The University of Tokyo
kureha@irl.sys.es.osaka-u.ac.jp

Abstract
There has been little exchange concerning perception between philosophy and other areas of cognitive science. This article tries to bridge this gap through explaining basic ideas of philosophy of perception and comparing them with those of cognitive science. In particular, we examine the view of perception held by proponents of 'projection science', according to which perception necessarily involves projecting internal representations to the world. We raise some questions to it from the philosophers' viewpoint and by doing so make visible some differences between philosophers' and cognitive scientists' interests and values. Through this attempt, we aim at paving the way for fruitful exchanges between them.
Keywords — Philosophy, Perception, Representation, Projection

0. はじめに

哲学は認知科学という学際領域を構成する諸分野の1つである。実際に、ドレイファスによる人工知能の基本前提の批判[1]や、クラークによる身体性認知研究の理論基盤の整理[2]、といった試みに代表されるように、哲学は認知科学が発展する上で、ときに批判的、ときに建設的な仕方で、重要な役割を演じてきた。

しかし、知覚に関しては、哲学と他の認知科学分野（以下では「認知科学」と略記する）の双方が膨大な研究を行ってきたにもかかわらず、両者の間であまり実りのある交流が行われていないように思われる。それどころか、基本的な用語や前提のレベルですらすれ違いが多く、意思疎通がうまくできない場合もしばしばある。例えば近年、日本の認知科学者たちにより、知覚を始めとする様々な認知活動に関して、表象の投射（projection）という側面の解明を目指す「プロジェクション科学」[3][4]という研究プロジェクトが進行中である。このプロジェクトは、「身体性認知」の次の認知科学のパラダイムを打ち立てようとする点で非常に野心的であり、また心と世界がどう結びつくかを長年議論してきた哲学とも問題意識が大きく重なるものである。しかし、その知覚に関する見解を哲学（特に「分析哲学」と呼ばれる伝統に属す「知覚の哲学」分野）の考え方に基づいて理解し評価しようとすると、哲学者が疑問に感じる点もある。

そこで本発表は、知覚の哲学の基礎知識を解説し、それに基づいてプロジェクション科学の知覚観に関する疑問を明確化することを試みる。ただし発表者らの目的は、この知覚観を論破したり、それを放棄するようその擁護者たちを説得したりすることにはない。むしろ、上記の作業を通して、哲学と認知科学の見解の相違の根底にある問題意識や価値基準のずれを可視化するとともに、両者の間で共有できる語彙やツールを見つけ出すことで、両者が今後実りある交流を行っていくための土台を作り出すことを目指すものである。

第 1 節では、知覚の哲学の問題意識と主要理論を解説する。第 2 節では、特に「表象」概念を中心として、知覚の哲学の用語体系を整理する。第 3 節では、以上の枠組みに基づいてプロジェクション科学の知覚理論について疑問を提起する。最後に第 4 節で、哲学と認知科学の間の問題意識や価値基準のずれについて考察し、またプロジェクション科学の今後の展望に関する提言を行う。

1. 「知覚の哲学」とは何か

1.1 知覚の哲学とその問題意識

知覚は常に哲学の中心問題の1つであり続けてきた。それは、知覚が世界に関するわれわれの認識において極めて重要な役割を果たしていると思われるからであり、またわれわれの心（と身体との関係）を解明する際に、現象的で意識的な知覚経験が特別の注意に値すると考えられてきたからである。

現在、英語圏を中心として定着している、いわゆる「分析哲学」においても、知覚に関する盛んな議論が行われており、特に 2000 年代以降、「知覚の哲学」は分析哲学の中でも最も活気のある領域の 1 つとなってい

る。そこで論じられているトピックは多岐にわたるが、特に、「知覚の現象的性格（phenomenal character）をいかに理解するか」という点は、哲学者の関心の中心部分を占めていると言えよう。

知覚経験の現象的性格とは、知覚主体当人の観点から感じられる、知覚経験の意識的で質的な側面のことである。（その側面はまた、「クオリア[1]」と呼ばれたり、「主体にとってその経験をもつとはどのようなことであるか（what it is like）」という言い回しによって表現されたりする。）例えば、パンダの毛並を見るという経験をもつときに主体に感じられる（モフモフとした質を伴う）経験のありようは、トマトの表面を見るという経験をもつ際に感じられる（つるつるとした質を伴う）経験のありようとは顕著に異なっているし、また、パンダの毛並みに実際に触れるときに感じられる（ゴワゴワ、ベトベトした質を伴う）経験のありようともはっきり異なっている。このことは、それぞれの経験の現象的性格が異なることを意味する。こうした知覚経験の現象的性格（またそれを構成する質）の本性をいかに理解すべきかに関して哲学者は議論しあっているのである。

この問いはまた、われわれが知覚経験において直接に気づくものは何であるのか（それは「外的な」ものか、「内的な」ものか）という問いと深く関わる。というのは、現象的性格を構成する諸々の質（モフモフとしたあの質）は、直接的な気づきの対象の特徴であるようにみえるからである。それゆえ、（後述のように）哲学的知覚理論はしばしば、知覚における直接的な気づきの対象は何であるかをめぐって対立する。

そして、以上の問いに十分な答えを与える知覚理論は、次の 3 つの重要な観点から満足のいくものでなければならないと哲学者たちは考えている。

存在論：「世界にはいかなる種類の存在者が存在するのか」
認識論：「われわれは何を知りうるのか」
現象学[2]：「われわれ知覚主体自身の観点から、知覚はどのようなものとして捉えられるか」

現代の哲学者たちが、これらのポイントに留意しながら知覚理論を構築しまた評価する際に、広く共有された前提となっているのは、われわれの前理論的・常識的な信念を理論にとってのデータとみなし、それらを可能な限りすくい取る理論を作るべきだという、近年の分析哲学において標準的な方法論的スタンスである（こうした方法は「反照的均衡」と呼ばれる）。このスタンスによれば、われわれは理論的探求以前に、知覚や関連するトピックに関して、ある程度、基本的な理解や信念をもっており、そして哲学理論は、探求の出発点となるそれらの信念とできる限り合致することを目指すべきである。したがって、例えば、ある知覚理論が、「われわれは世界について何も知りえない」というような常識的に受け入れがたい認識論的帰結をもつ場合には、その理論は望ましくないものとみなされる。もちろん正当な理由があれば、前理論的な信念の一部が誤りとして退けられることもある。しかし、前理論的信念は理論に対して重要な制約を課すものであり、必要なくそれらを否定することは避けるべきだとされる。

また、現代の知覚をめぐる哲学的議論において、もう 1 つの（少なくともかなり広く）共有された前提となっているのは、自然主義である。自然主義とは、哲学を科学と連続的なものとみなす立場である。この立場は、「哲学は、諸々の科学的知識に先立ち、科学的知識に依拠することなく、われわれの（科学的知識を含む）認識の正当性や、実在の本性、等々を明らかにする学問だ」という哲学観に対するアンチテーゼである。自然主義には様々な種類があり、哲学者ごとにどのようなバージョンを信奉するかは異なるし、またもちろん自然主義に反対する哲学者もいるが、一般に、「経験科学が描く世界像と明確に衝突すると考えられる存在者（例：不滅の霊魂）は認めるべきではない」という存在論的方針や、「哲学的な知覚理論は、知覚に関する経験科学的データとも整合すべきだ」という方法論的方針は、現代の哲学では標準的であると言えよう。

こうした自然主義を背景として、哲学においても、科学の具体的な成果を取り上げ、考察対象とする動きが見られるようになっている（例：色覚に関する科学的発見、二重視覚システム説、等々）。しかし、その一方で、

[1] ただし、「現象的性格」と「クオリア」は、哲学では厳密に使い分けられることもある。その場合、「現象的性格」は、単に知覚経験の意識的で質的な側面を（それが何によって構成されるにせよ）理論中立的に指すのに対して、「クオリア」は経験それ自身がもつ内在的質（という論争の余地のあるもの）を指すものとして用いられる。

[2] この「現象学 phenomenology」という語は、種々の経験の一人称的観点から捉えられる側面を指すものであり、フッサールに始まる哲学の伝統を指す用語としての「現象学」とは区別される。

知覚を可能にする神経メカニズムについての認知（神経）科学的知見などへの哲学者の興味は、現状では、限定的なものにとどまっている。

1.2 知覚の哲学の主要理論

これまで提起されてきた哲学的な知覚理論は、大きく、以下の 3 つの種類に分類される。

直接実在論：知覚者は心から独立に存在する対象（外界に存在するパンダ）そのものを、心的な代理物など介することなく直接に知覚する。（素朴実在論、志向説、二重要素説など）

間接実在論：知覚者は直接には、「センスデータ」、「観念」、「脳が生み出した幻」など、外的対象の代理物となる心的対象を知覚し、それを通して心から独立の外的対象を間接的に知覚する。われわれが直接に見るのはパンダの心的な代理物である。そして、われわれは、テレビの映像を見ることによってサッカーの試合を見るように、その代理物を見ることによって間接的にパンダそのものを見るのである。（センスデータ説、神経構築説など）

反実在論：知覚者はただ心的な対象を知覚するだけであり、その「向こう側」に心から独立の対象など存在しない。パンダはわれわれが直接に知覚する心的対象の集まりであり、心から独立のパンダなど存在しない。（観念論、現象主義）

前理論的な観点から、われわれにとって最も自然に感じられるのは、直接実在論である。しかし、この立場は、比較的近年に至るまでは、必ずしも主流ではなかった。その主な理由の 1 つは、「心から独立の対象がなくても、そうした対象を正しく見る（と日常的にみなされる）場合と同様の経験が生じうる」という点である。例えば、パンダの幻覚を見ている人は、心から独立の対象を見ていない。しかし、それでも、実際にパンダを見るときと同じように、その人にはしかじかの色や形をした何かが現に見えているのだから、その人は心的な対象を見ているのでなければならない。そして、ひとたびこうして心的対象が導入されるなら、幻覚と正しい知覚は見分けのつかない経験である（もしくは、ありうる）から、正しい知覚の場合も、われわれが直接知覚するのは心的対象とみなすべきだ。このような論拠から、間接実在論や反実在論が勢力をもっていたのである。（ちなみに、ここで持ちだされた直接的な知覚対象としての心的対象は「表象」と呼ばれることがあるが、以下の 2 節で確認するように、今日の哲学で用いられる意味での表象とは異なる点に注意せよ。）

しかし、現在、間接実在論や反実在論は下火となり、何らかの直接実在論を採る論者が大勢を占めている。その主な理由は、(a)間接実在論や反実在論――より正確には、哲学におけるそれらの標準形である「センスデータ説的」間接実在論・反実在論――が、先ほど見た理論評価の基準に照らして受け入れがたい立場だという広範な合意が形成されたこと、(b)幻覚や錯覚の可能性を踏まえた形で、直接実在論を守る見込みのある知覚観が注目されるようになったこと、の 2 点である。

(a)について説明すると、まず、センスデータ説的間接実在論・反実在論はともに、センスデータの導入に伴う存在論的な問題点を抱えていると指摘される。まず、物体とは違い、センスデータに関しては、どう答えるべきか不明な問いが生じる（例：「瞬きの前後に見えるセンスデータは同一なのか、別物なのか」など）。また、センスデータという心的対象を認めることは、自然主義の枠内には収まり難い存在者にコミットすることだと一般にみなされており、自然主義的傾向が支配的な現代の議論状況では、この点からもセンスデータを認める立場は回避される傾向にある。

また、これら両見解に対しては、現象学的な問題点も指摘される。それは、「われわれ知覚主体自身にとって、知覚経験は外的世界に直接に気づくことであるように思われる」という現象学的データと両立しがたいという点である。われわれが自分自身の知覚経験を反省するときに見出すのは、心的対象などではなく、むしろ経験されている外的対象とその性質そのものであるように思われる（この現象学的ポイントは「経験の透明性」と呼ばれる）。直接的な知覚対象を心的対象とみなす理論がこの点とどう折り合うのかは明らかではない。

さらに、センスデータ説的間接実在論に対しては、「ひとたびわれわれが直接に知覚しうる範囲をセンスデータに限るなら、われわれは心から独立の世界について知ることができるという常識的信念を確保するのは困難となる」という認識論的批判もしばしば向けられる。間接実在論者はしばしば、「われわれはセンスデータに関する直接的な知識に基づいて、心から独立の事物について推論的に知ることができる」と主張する。しかし、「かくかくのセンスデータが存在する」という前提のみから、「しかじかの心から独立の対象が存在する」という結論を導き出す推論とはどんなものなのか、間接実在論者は説得力のある仕方で示していない。

他方で、反実在論をとり、物体の心からの独立性を否定してしまえば、物体の認識可能性は確保できるかもしれない。しかし、この説は、「物体は心から独立に存在する」という常識を否定する点で、重大な存在論的代償を払うことになる。

以上のように、センスデータ説的な間接実在論・反実在論には数多くの問題があるという同意が形成される一方で、(b)で述べたように、近年、幻覚や錯覚の存在を踏まえた上で、直接実在論を採ることを可能にする見込みがあるとされる方針が注目されるようになった。それは、知覚経験を、信念や判断と同様に、世界のありようへと向けられた、「表象的」ないし「志向的な」心的状態とみなすという方針である。次節で、この方針の内実とメリットを確認することにしよう。

2. 知覚と表象

前節で見たように、現代の知覚の哲学における 1 つの影響力のある見解は、知覚経験は表象的である、というものである。ただし、ここでの「表象」は、センスデータや観念がしばしば「表象」と呼ばれるのとは異なる意味で用いられている。本節では、現代的な意味での表象とは何なのか、知覚経験を表象的とすることと直接実在論とがどのように関係するのかを見る。

2.1 表象とは何か？

まず、「表象媒体（representational vehicle）」と「表象内容（representational content）」によって表象を理解する〈媒体 - 内容〉図式を導入しよう[5]。表象媒体は、世界の中のものごとについてのものであり、それらのものごとを一定のあり方をするものとして表す。表象内容は、表象媒体が表すものごとのあり方である。例えば、(ア)の文（正確には、紙ないしスクリーン上の一定のパターン）は表象媒体であり、その表象内容は、シャンシャンはパンダだということである。

(ア) Xiang Xiang is a panda.

この表象内容にはシャンシャンというパンダそのもののあり方が含まれるが、そうしたあり方は(ア)という表象媒体そのものの構成要素ではない。あるいは、(ア)という表象媒体は 4 つの語から構成されているという特徴をもつが、その表象内容はそうした特徴をもたない。より一般に、表象媒体そのものがもつ特徴やその構成要素が、それが表す表象内容そのものの特徴やその構成要素である必要はない（そして、実際多くの場合、それらは全く異なる）。知覚の哲学においては単に表象ということで、しばしば表象媒体のことが意味される。本発表でもこうした用語法に従うことにしよう。

ある表象媒体が表すものごとのあり方は、世界の実際のあり方に合致する場合もあれば、そうでない場合もある。例えば、(ア)の内容はこの世界の実際のあり方に合致しているが、「Xiang Xiang is a dolphin.」という文の内容はそうではない。ある表象媒体の表象内容が世界の実際のあり方と合致する場合、その表象媒体はものごとのあり方を正確(accurate)に表象している[3]。そうでない場合、その表象媒体はものごとのあり方を正確に表象しておらず、誤表象している。このように、表象の内容は、表象の正確さの条件――どのような場合にその経験はものごとのあり方を正確に表象し、どのような場合にそうしないのか――を特定するものである

ものごとをある仕方をしたものとして表象するのは文だけではない。例えば、右の絵はパンダを一定のあり方をしたものとして表象している。現代の哲学において広く受け入れられている見解によれば、信念や知識といった心的状態は 1 種の表象であり、一定の表象内容をもつ。さらに心的表象は、絵や文とは異なり、本来的、非派生的な表象だと考えられている。絵や文は、心的表象に依存して派生的に表象作用をもつ。それに対して、心的表象の表象作用は他の種類の表象がもつ表象作用に依存していない。

では、そもそもいかにして心的表象は特定の表象内容をもつのだろうか。心的表象とその内容の関係を扱う「サイコセマンティクス」は、80 年代以降の心の哲学の主要な関心事の 1 つであった。サイコセマンティクスの問題に自然主義的な説明を与えようとするプロジェクトは「志向性の自然化」と呼ばれる。このプロジェクトにおいて現在もっとも有力視されているのは、表象媒体と表象内容の関係を、表象媒体がそれを生み出しまた用いるシステムにおいて果たす機能（とりわ

[3] 厳密には、こうした説明が当てはまるのは、信念（後述するように信念も表象媒体の 1 種である）や主張文など一部の（とは言え多くの）記述的な表象に限られる。例えば、欲求や意図はそもそも正確だとは言われない。知覚経験が表象だとする現代の理論の多くは、知覚を前者のタイプの表象であるとみなしている。

け生物が進化の過程で自然に獲得した生物学的機能）の観点から考察しようというものである[5]。（サイコセマンティクスの解説として、[6]を参照せよ。）

第 1 節の最後で触れたように、現代の知覚の哲学における 1 つの有力な立場は、知覚経験を表象的な状態とみなすという立場である。第 2.2 項ではそうした立場の中でも、特に志向説と呼ばれる立場を取り上げ、〈媒体 - 内容〉図式に基づいて、志向説が直接実在論の 1 形態であるということを確認する。

2.2 志向説と直接実在論／間接実在論

志向説によれば、知覚経験とは一定の表象内容をもつ心的表象である。あなたが眼前のパンダを目にしているとき、あなたの経験はそのパンダを、大部分白く、ところどころ黒く、あなたの眼前に位置し、等々、というあり方をしたものとして表象する。そして主体があるものごとを経験するというのは、経験という特定の種類の心的表象をもつということに他ならない。志向説にとって、知覚を表象的に捉えることの眼目は 2 つある。1 つは、間接実在論を否定し、直接実在論を擁護すること、もう 1 つは、（信念など他の表象状態にはない）知覚に特有の現象的性格を、表象という観点から説明するということである。順を追って見ていこう。

志向説は、「知覚経験において主体は何を直接知覚するのか」という問いに対して、経験が表象するものごとだ、と答える。とりわけ主体が真正な（veridical）知覚的表象をもつ場合、主体は、それが表象する外界のものごとを直接知覚している。ここで注意すべきは、経験という心的表象をもつということと、そうした心的表象を知覚するということの区別である。志向説によれば、外界のものごとを経験するというのは、そうしたものごとのあり方を内容とする心的な表象媒体をもつということであり、そうした脳内の表象媒体を知覚する、すなわち、脳という物体のあり方を内容とする表象をもつということではない。これはちょうど、シャンシャンはパンダであるという信念をもつ人は、シャンシャンについて何かを信じているのであって、自分の脳や心について何かを信じているわけではない、というのと同じである。

志向説はさらに、錯覚、幻覚を誤表象の一種として扱う。例えば、眼前にパンダはいないのも関わらず、目の前にピンクのパンダがいるように見えたとしよう。志向説によれば、この幻覚経験は、眼前にパンダがいるという誤った内容をもつ心的表象である。そして、その幻覚に陥っている主体は、そうした心的表象をもっているのであり、その心的表象を知覚しているわけではない――パンダが目の前にいると信じている人は、世界について誤った信念をもっているのであって、自分の脳や心について何かを信じているわけではないのと同じように。

このように、知覚経験を表象的に捉えることの眼目の 1 つは、頭／心の中にある何かを知覚することを通じて外界の対象を間接的に知覚するという考えを否定することにある。志向説において、心的な表象媒体は、経験において主体が直接知覚する対象ではない。心的表象は、間接実在論が措定する「センスデータ」や「脳が生み出した幻」のように、世界へのアクセスを遮断するヴェールのようなものではなく、むしろそれをもつことで世界にアクセスすることを可能にするようなものである。このような知覚の捉え方は、センスデータに伴う存在論的問題を回避するだけでなく、知覚経験を直接に外界に向けられたものとみなすことで、現象学的・認識論的観点からも適切なものとなる見込みがある。また、この見解は外的対象の心からの独立性を否定する必要もない。こうした見通しから、志向説に代表される「知覚は表象的だ」という考えは、現在の知覚の哲学におけるパラダイムとなっている。

次に現象的性格の問題に目を向けよう。この問題に対する志向説の基本的な考えは、知覚経験の現象的性格も表象という観点から理解できる、というものである。ただし、具体的にどう理解されるのかについては、志向説論者の中でも意見が分かれる。ある志向説論者は、経験の現象的性格は経験の表象内容によって尽くされる（パンダがモフモフに見えるという経験がある現象的性格をもつことは、その経験がパンダをモフモフしたものとして表象しているということに他ならない）と主張しつつ、知覚は「非概念的な表象内容」をもつ（他方、他の表象的状態は「概念的な表象内容」をもつ）とみなすことで、知覚に特有の現象的性格を捉えようとする。

また、別の志向説論者は、表象内容の違いではなく、表象内容に対する主体の態度（表象内容と関係する仕方）の違いに、知覚経験の現象的性格を捉える手掛かりを求める。この考え方によれば、表象内容と〈信じる〉という仕方で関係することもできるし、〈欲する〉という仕方でそうすることもできるのと類比的に、われわれは表象内容と視覚的に関係することや、触覚的に関係すること、等々ができる。そして、こうした感覚様相

に特有の内容との関係の仕方によって、知覚に特有の現象的性格は説明される。

志向説論者によるこれらの説明が成功しているかどうかは決して明らかでない。そこで、知覚経験を表象的とみなす人々の中にも、知覚経験の現象的性格を適切に捉えるには、表象内容（やそれと関係する仕方）に加えて、何らかの非表象的な要因を認めるべきだと考える人たちもいる。彼らは、知覚経験には、表象的な側面に加えて、主観的で感覚的な側面があるとみなすことで、知覚の現象的性格を説明しようとする。第 3 節で見る二重要素説はそのような立場の 1 つである。

最後に、想定される 2 つの疑問に答えておきたい。

疑問 1 : 表象媒体が頭にあるとして、表象内容はどこにあるのか？

応答 : 表象内容は、ある種の抽象的な対象であり、世界の中の具体的な位置をしめるものではない。それゆえそれは、そもそもそれは「どこにあるのか？」という問いを適切に問うことができないようなものである（0 という数はどこにあるのか、という問いが不適切であるのと同様に）。

他方で、内容が抽象的対象であるということは、内容が実際の世界の中でのものごとのあり方と一致している場合、その内容をもつ表象が、そうしたものごとについてのものであるということと両立する。この意味で、真正な知覚経験をもつ主体は、実際の外界の対象を知覚しているということができる。

疑問 2 : 表象内容が頭の中にないとすれば、なぜわれわれは内容に基づいて行為できるのか？

応答 : この点を理解するためにも、表象媒体と表象内容の区別が重要になる。表象内容は確かに頭の中にない、それどころがそれは抽象的対象であり、因果的な効力をもたない。しかしここから表象媒体がそうであるということは帰結しない。志向説によれば、知覚経験とは 1 種の心的表象であり、一定の神経活動のパターンによって実現されている。そうしたパターンは、物理的なものであり、物理的性質をもつ。内容に基づいた行為とは、こうした表象媒体が、内容に対応するような仕方で因果的力をもつことによって可能になる。

3. 知覚はプロジェクションか？

本節では、これまでの議論を踏まえて、プロジェクション科学が採用する知覚観について検討を加える。

3.1 プロジェクション科学とは何か？

鈴木ほか[3]はプロジェクションを「内的に構成された表象と世界とを結びつける心の働き」と定義する。そしてプロジェクション科学とは、この投射の働きに焦点を当てることで、脳内の表象が外界の対象といかにして関係づけられるのかを解明することを目指すものとされる。プロジェクション科学では、表象が外界の対象と（比較的）正確に対応する場合に加えて、表象がその入力源となった対象とは別の対象に対応づけられる場合（「異投射」）や、外界に表象の入力源となる対象が存在しないにもかかわらず投射が行われる場合（「虚投射」）をも考慮対象に含める。この正常な投射・異投射・虚投射は、知覚の場合にはそれぞれ、真正な知覚・錯覚・幻覚に該当する。投射の働きは、知覚だけでなく、様々な認知活動に介在しているものとされ、具体的にはモノへの愛着や、幽霊・神への信仰、VR などが例として挙げられている。ただしここでは、最も基本的な認知活動である知覚に話題を絞りたい。

プロジェクション科学は、知覚を、脳内の表象を外界に投射する働きと捉える。このように、投射を引き合いに出して知覚を説明しようとする見方を「投射的知覚観」と呼ぶことにしよう。投射的知覚観は、プロジェクション科学の登場以前から存在していたものである。しかしそれは、評判がよかったとは言い難い。例えばマッハ[7]やジェイムズ[8]が、この見方に対して否定的なコメントを残している。その一方で、鈴木[4]も指摘するように、ポランニー[9]はこの否定に異議を唱えている。ただし、マッハやジェイムズ、ポランニーが言及する投射的知覚観では、心ないし身体が受け取った感覚を投射する、という言い方がされ、頭の中の表象を投射する、と述べるプロジェクション科学とはやや内実が異なる。この相違が何を意味するかについては後（第 3.2 項の末尾）で考察する。

プロジェクション科学が知覚の説明において「投射」を引き合いに出すのは、表象と外界の結びつけを理解するためであるとされる。鈴木はこの点を、「表象の考え方からすれば, 何かが見える時には, それはシステム内部において見えるということになってしまう．しかし我々は頭の中に何かを見るわけではなく，外の世界に視覚対象を知覚する」[4]、と説明している。しかしこの知覚観が知覚経験の本性をどのように捉えているかは、哲学者の目には明らかでない。そこで、この点を理解するために、それを代表的な知覚の哲学理論と照らし合わせてみよう。

3.2 プロジェクション科学と知覚の哲学理論

本項では、プロジェクション科学の投射的知覚観を間接実在論、志向説、二重要素説の 3 つの知覚の哲学理論と照らし合わせつつ、検討を加える。

間接実在論

まず、間接実在論から検討しよう。前掲のように、鈴木は「表象の考え方からすれば, 何かが見える時には, それはシステム内部において見えるということになってしまう」と述べるが、ここで「表象の考え方」と言われているものは間接実在論と酷似している。すなわち、表象というものを、〈媒体-内容〉図式で捉えられるものではなく、システム（心／脳）の内部で生み出される直接的な知覚対象として捉えているように読み取れるのである。そこで考えられるのは、プロジェクション科学において、ある種の間接実在論が（部分的にであれ）前提されている、という可能性である。この場合、表象の投射とは、心／脳の中にある知覚対象（例：パンダの表象）がもつ性質を、外界にある事物（例：実在のパンダ）に帰属する作用として理解できる。

第 1 節では今日の哲学の世界で間接実在論が支持を得ていないことを述べた。しかし哲学と異なり、認知科学では現在でも、われわれが直接見るものは脳が作り出した幻にすぎない、という間接実在論が根強い支持を得ている[10][11]。この状況は、認知科学者が「センスデータ説」のような哲学者の放棄した古い考え方を引きずっているというよりも、「神経構築説（neural construction theory）」と呼びうるような、科学的論拠と認知科学特有の関心に支えられた、新しい種類の間接実在論が登場している、と見る方が建設的だろう。

だが、神経構築説はやはり従来の間接実在論が直面したものと同じ難点を孕んでおり、発表者らの目には魅力が乏しいように思われる。特に深刻なのは、間接実在論を採ってしまえば、投射の働きを持ち出しても、結局のところ外界との対応づけを確保することは困難に思われる、という点である。知覚が直接的には内的な表象＝「脳の中の幻」を見ることだとすれば、当該の表象とそれが投射される実在の事物が対応しているという保証がどのようにして得られるかは明らかでないのだ。こうして神経構築説は、認識論的な観点から見て困難に直面する。また、存在論的観点から見ても神経構築説には難点がある。この説を採る認知科学者は二元論にコミットするつもりはないだろうが、「脳の中の幻」とされる知覚対象がどんな種類の存在者なのか、それが物理的にどのように実現されているかは極めて不可解なのである。以上のような認識論的および存在論的な関心に認知科学者は共感を覚えないかもしれないが、哲学的には無視しがたい点である[4]。

志向説

前節までで述べたように志向説は現代の知覚の哲学の主流の位置を占めるものではあるが、投射的知覚観とは両立しがたいと考えられる。ここで問題になるのは、プロジェクション科学が「表象」と呼んでいるもの——脳内から外界へ投射されると言われるもの——は、直接実在論的な「表象」理解に基づく志向説の枠組みの中で何に対応するか、という点である。それは、一方で、表象媒体ではない。というのも、知覚経験の表象媒体を成す神経活動は頭の中にあり続けるからだ。また他方で、それは表象内容でもない。というのも、知覚経験の表象内容を成す事態は元々頭の中にないからだ。表象媒体が頭の中にあるからと言って、表象されるものが頭の中に見えなければならないわけではない。そうでなければならないと考えるのは、表象そのものの性質と表象内容の性質の混同である。「頭の中の絵」のような内的な知覚対象という意味での「表象」は志向説の枠組みの中には存在しないのだ。従って、志向説の下では、内部の表象を外部に投射する、という知覚の捉え方は不適切になる。むしろこの説では、投射の働きを持ち出すまでもなく、知覚経験が表象的であると認めることによって、真正な知覚の場合にはそれが外界と関係する（外界で成立している事態をその内容とする）、ということは確保されているのである。

無論、直接実在論的な「表象」理解を採用したからと言って、すべての問題が解消するわけではない。残される問題の 1 つは、前述のサイコセマンティクスの問題

---

[4] 哲学における「間接実在論」を斥けることは、心理学における「間接知覚論」を斥けることではない、という点に注意せよ。両者はしばしば混同されるが、前者が知覚経験においてわれわれが直接的に知覚する対象の存在論的身分に関わるものであるのに対して、後者は知覚プロセスにおける推論の介在の有無に関わるものである（知覚を環境内の情報の直接的ピックアップとみなす生態学的知覚論と対比される）。この区別を踏まえれば、知覚を推論的な過程による表象の構築と捉える認知科学の標準的見解は、直接実在論と両立可能だと言える（より詳しい説明は[12]を参照）。

である。知覚経験を含む表象的な心的状態がいかにしてその固有の表象内容をもちうるか、ということが解明されなければならない[5]。もう 1 つは、現象的性格の問題である。前述の通り、経験の現象的性格が表象という観点から十全に説明できるかどうかについては異論もある。だが、これらの問題が残されているとはいえ、間接実在論的な「表象」理解の下では、外界との対応づけの問題は解決不可能になってしまう懸念が大きいため、直接実在論を採用した上で上記の問題の解決を図るのが標準的となっている。

二重要素説

鈴木[4]も述べるように、理論心理学者のハンフリー[13][14]は近年、投射を引き合いに出すような知覚理論を提唱している。彼の理論は、知覚を感覚と思考（あるいは判断、推論）という 2 つの要素から成るものとして説明する「二重要素説」に分類される。二重要素説は、18 世紀英国の哲学者リードが当時主流だった間接実在論に抗して唱えた理論であり、直接実在論の最も古典的なバージョンとみなされる。

ハンフリーはリードを引き合いに出しながら、知覚において、感覚刺激から「感覚（sensation）」と「知覚」という 2 種類の表象が作られる、と論じる。この際、知覚が外界のあり方を表象するのに対して、感覚は身体表面に与えられた刺激、およびそれに対する知覚主体の反応を表象するとされる。ハンフリーの理論は志向説と同じく知覚経験を表象的とみなすが、このように知覚とは別に、外界ではなく身体のあり方を表象する感覚を措定する点で、志向説と異なる。それが措定されるのは、知覚経験がもつ現象的性格を説明するためである。ハンフリーによれば、現象的性格は感覚に由来する。例えば、パンダを見るときに感じられるパンダの毛並みのモフモフした質感は、網膜刺激と知覚主体の相互作用を表象する感覚に由来する。しかしわれわれは誤ってそれを外界の事物（パンダ）がもつ性質と判断するのであり、この判断（思考）の働きのおかげでわれわれは外界の事物がもつ性質を知覚するのだ、と言う。

以上の説は、一見して、知覚経験の「透明性」――すなわちわれわれが自らの経験を反省するときに見出される性質はいずれも、経験される外的事物のもつものであるように見えるという事実――に反する。例えばパンダを見るときにわれわれが気づくモフモフした質感は、パンダがもたらす網膜刺激の性質ではなく、外界のパンダがもつ性質であるように思われる。ここでハンフリーは、次のように述べて、「投射」を引き合いに出す。「もし今、外部のもの自体に現象的属性が本来具わっているとあなたが本当に信じているとすれば、それはあなたが何らかのかたちで、その感覚を自分の頭のなかから外の世界へと投射しているからにほかならない」[14]。また、ハンフリーは、知覚と感覚が乖離しうる事例として、色失認（色感覚は影響を受けないが、色知覚は失われる事例）や盲視（色知覚は無事だが、色感覚は失われる事例）を挙げて、知覚に加えて感覚の存在を認める必要がある、と主張する[15]。

ハンフリー的な二重要素説は、われわれの経験が感覚刺激の性質を外的対象に帰属させる体系的な誤りを犯しているという過激な見解であるために、その支持者は多くはないものの、特に志向説とは異なる仕方で現象的性格を説明しようとするものとして、1 つの検討に値する立場だとは言える。そして、この説は、一見して投射的知覚観とうまく合致するように思われる。この場合、表象の投射とは、感覚が表象する身体に関する性質（例：網膜刺激に由来する質感）を、知覚が表象する外界の事物（例：実在のパンダ）に帰属する作用として理解できる。ただし、感覚も知覚もそれ自身は頭の中にあってその外部（身体／世界）の対象を表象するものとされるため、「表象を脳内から外界へ投射する」という言い方は不適切になり修正を要する。

より深刻な問題として、プロジェクション科学とハンフリーの説にはすれ違いが見られる。二重要素説においては伝統的に、外界との対応づけの機能は感覚に付加される思考（あるいは概念、判断）によって担われるとされている。ハンフリーもこれを踏襲して、思考作用のもつ志向性が外界との結びつけの役割を果たすと認めている。彼が投射を引き合いに出すのは、あくまで知覚経験の透明性の事実を説明するためなのだ。プロジェクション科学は、投射的知覚観を採用するだけでなく、この投射作用を引き合いに出すことで表象と外界の結びつけを理解することを目指すが、ハンフリーの説では投射作用にそのような積極的な役割は認めら

[5] 本文中に挙げた哲学的問題に加えて、認知科学の問題として、空間的定位の問題――知覚される性質の空間的配置はどんなメカニズムによってコード化されるのか、錯覚や幻覚の場合の誤定位はどのようなメカニズムの変調によって生じるのか――もまた、投射的知覚観の真偽に関わりなく残される。

れていないのである。

まとめ

プロジェクション科学は「内部から外部への表象の投射」を引き合いに出して表象と外界の結びつけを説明しようとするが、以上で確認したように、知覚の哲学で現在有力視されている理論枠組みのいずれもこうした考え方となじまない。それどころか、「表象と外界の結びつけ」という問題意識自体に疑問の余地がある。ここで、前述の「感覚が投射される」と「表象が投射される」の相違という論点に立ち戻ってみよう。従来の投射的知覚観は前者を主張してきたが、プロジェクション科学は後者を採用するのであり、その際に間接実在論的な「表象」理解を混ぜ込んでしまっている懸念がある。「表象」理解を（第 2.2 項で紹介した）現代的なものにアップデートすれば、上記の疑問は（部分的に）解消されるのではないだろうか。

その一方で、上記の理論枠組みのどれを採っても知覚経験の現象的性格については決定的な説明が与えられるとは言い難く、その解明に投射的知覚観が貢献する可能性はあるかもしれない。この点については、結論でさらに論じよう。

4. 結論——知覚の哲学と認知科学の実りある対話に向けて

ここまでで、知覚の哲学における主流の考え方に準拠して、プロジェクション科学の知覚観への疑問を述べてきた。とはいえ、最初に述べたとおり、発表者らは、この理論を論破したり、その擁護者たちを説得したりすることにはない。発表者らが抱く疑問は、1 つには哲学と認知科学の間の問題意識や価値基準のずれ、もう 1 つには両者の間の用語法のずれに起因すると思われる。そこで、これらのずれが具体的にどこにあるかを確認しよう。

1 つの大きな見解の相違は、間接実在論に対する態度にあるだろう。第 1 節で確認したように、哲学では、常識的見解と両立困難であるという理由でそれは拒絶される。だが認知科学には、常識を救いとることへの動機づけはあまりないだろう。むしろ、例えば近代天文学が天動説を覆したように、ドグマと化した常識を覆していくことこそが科学としての正常な発展のあり方だと考えるのではないだろうか。実際に知覚の認知科学はこれまで、意識のための視覚と行動のための視覚の分離や変化盲・不注意盲の存在など、常識に反する事実を発見してきた。以上の点は、認知科学者の中に間接実在論への賛同者が多い 1 つの理由かもしれない。

哲学も常識に反する理論を一概に否定するわけではない。常識は（上述のように）探究の出発点になるものだが、それとの一致は哲学理論に期待される様々な美点の 1 つにすぎず、他にも様々な美点（例えば科学的知見との一致や、哲学の他の分野の見解との一致）がある。また、「常識」と呼ばれるものもしばしば相反する様々な見解の寄せ集めであり、理論の選択に際してはどの常識的見解を救いどれを捨てるかを取捨選択することが必要になる。結局のところ、どの哲学理論が優れているかは、どれだけの範囲の重要な見解を汲み取れるかによって決まる。この際、ある重要な常識的見解と合致する理論がそれと衝突する理論に比べて同等以上の説明力をもつならば、前者を採ることが合理的だ、と考えるのが一般的である。われわれが外界の対象を直接知覚しているという見解は、認識論的・存在論的な含意も強く、重要なものと認識されている。

発表者らは、以上のような哲学の価値基準を認知科学者に対して押し付ける気はない。ただし、認知科学の見解と哲学の見解が何らかの点で対立した場合に、後者を単に非科学的とみなすのではなく、それが相応の根拠と独自の関心に基づくものであることを理解してもらえれば、実りある交流ができるだろう。

また、語彙に関しても哲学と認知科学の間には大きなずれが見られる。特に「表象」概念を巡っては、現代哲学では〈内容-媒体〉図式で捉えられるものとして理解が深められているが、それが認知科学には浸透していないように思われる。発表者らはこうした語彙の用法についても認知科学者に押し付けるつもりはないが、もし役に立つと思うなら共有してもらえると意思疎通が容易になる。あるいは、哲学者が使用する語彙について違和感を覚える点を指摘してもらえると、哲学内部で自明視されていることを批判的に問い直す機会になってありがたい。

最後に、プロジェクション科学の発展に貢献しうるような提案を行いたい。この際、強調しておきたいのは、発表者らは、プロジェクション科学を、これまで計算主義認知科学や身体性認知科学が着目してこなかった側面に光を当てようとする野心的な取り組みとして評価している、という点である。身体性認知科学では、環境への適応という知能の側面が強調されてきた。だが、人間のような認知エージェントの行動には、受動的に既存の環境に適応するだけでなく、能動的に新しい

現実を構築するという面がある。発表者らは特に、プロジェクション科学が、この現実の構築という知能の側面に取り組んでいこうとする点に、共感を覚える。

この試みを進めていく上で、幾つかの課題を切り分ければ見通しが良くなるだろう。そして、この切り分けの作業に際しては哲学の概念ツールが役立つと思われる。例えば、プロジェクション科学では、投射の働きによって「世界が意味で彩られる」[4]といった言い方がなされるが、この「意味」という表現には曖昧さがある。この点に関わる問題の候補として、知覚の哲学では伝統的に以下 2 つの問いが区別されてきた。

(i) **志向性の問題** : 知覚経験はいかにして外界の事物を一定のあり方をしたものとして表象するのか。

(ii) **現象的性格の問題** : 知覚経験はいかにして一定の現象的な質をもっているように感じられるのか。

(i)は信念などと共通とされ、鈴木[4]が言及する記号接地問題などで論じられているのはこちらである。これに対して、(ii)は知覚を始めとする意識経験に特有とされる。これら両者の関係については哲学でも議論がなされており、幾つもの立場がある。例えば、現象的性格を表象という観点から理解しようとする志向説は、(i)に対して自然主義的な説明を与えた上で、それに基づいて(ii)を説明しようというものである。これに対して、知覚は感覚と思考の 2 つの要素から成り立っているとする二重要素説は、(i)を思考の働きによって、そして(ii)を感覚の働きによって、別々に説明しようと試みる。

プロジェクション科学は、(i)と(ii)を混ぜ合わせて、「知覚主体にとってなぜ外界の事物が一定の現象的な質をもっているように感じられるのか」という問題を提起し、それに「投射」という単一の装置で答えようとしていると見なせる。だが、この 2 つの問題の関係が自明でない以上、両者を一旦切り分けた上で、その関係を検討した方がよいだろう。発表者らの見るところ、一方で、第 3 節で論じたように、(i)の志向性の問題を解決するために「表象の投射」を引き合いに出すことが適切であるかは疑問の余地がある。そこで、志向説や、あるいは、現代的な「表象」概念をめぐる哲学的議論の蓄積が、プロジェクション科学に寄与する点があるかもしれない。他方で、(ii)の現象的性格の問題に関しては、これまで認知科学からの取り組みがあまりなされてこなかったため、投射という観点からそれに取り組み、現実の構築という知能の側面を明らかにする新たな試みが始まったのならば、非常に興味深い。いずれにせよ、こうした問題の切り分けによりプロジェクション科学の狙いを明確化することは、この新たな企てがより実り豊かに展開していく上で有益だろう。

参考文献

[1] Dreyfus, H. L., (1972). *What Computers Can't Do: A Critique of Artificial Reason*, New York: Harper & Row. (黒崎政男・村若修 (訳) (1992). 『コンピュータには何ができないか――哲学的人工知能批判』, 産業図書.)

[2] Clark, A., (2003). *Natural-Born Cyborgs: Minds, Technologies, and the Future of Human Intelligence*, Oxford: Oxford University Press. (呉羽真・久木田水生・西尾香苗 (訳) (2015). 『生まれながらのサイボーグ――心・テクノロジー・知能の未来』, 春秋社.)

[3] 鈴木宏昭・小野哲雄・米田英嗣, (2019).“特集「プロジェクション科学」編集にあたって”, *Cognitive Studies*, Vol. 26, No. 1-2, pp. 6-13.

[4] 鈴木宏昭, (2019). “プロジェクション科学の目指すもの”, *Cognitive Studies*, Vol. 26, No. 1-2, pp. 52-71.

[5] Dretske, F., (1995). *Naturalizing the Mind*, Cambridge, MA: The MIT Press (鈴木貴之 (訳), (2007). 『心を自然化する』, 勁草書房.)

[6] 戸田山和久, (2014). 『哲学入門』, 筑摩書房.

[7] Mach, E., (1918). *Die Analyse der Empfindungen und das Verhältnis des Physischen zum Psychischen*, Jena: Gustav Fischer. (須藤吾之助・廣松渉 (訳) (1971). 『感覚の分析』法政大学出版局.)

[8] James, W., (1892). *Psychology: Briefer Course*, London: Macmillan and Co. (今田寛 (訳) (1992). 『心理学 (上・下巻)』岩波書店.).

[9] Polanyi, M., (1967). *The Tacit Dimension*, London: Routledge and Kegan Paul. (高橋勇夫 (訳) (2003). 『暗黙知の次元』, 筑摩書房.).

[10] Smythies, J. R. & Ramachandran, V. S., (1997). “An empirical refutation of the direct realist theory of perception”, *Inquiry* Vol. 40, Iss. 4, pp. 437-438.

[11] Frith, C., (2007). *Making Up the Mind: How the Brain Creates our Mental World*, Oxford: Blackwell. (大堀壽夫 (訳) (2009). 『心をつくる――脳が生み出す心の世界』, 岩波書店.)

[12] Drayson, Z., (2018). “Direct perception and the predictive mind”, *Philosophical Studies* Vol. 175, Iss. 12, pp. 3145-3164.

[13] Humphrey, N., (2006). *Seeing Red: A Study in Consciousness*, Harvard: Harvard University Press. (柴田裕之 (訳), (2006). 『赤を見る――感覚の進化と意識の存在理由』, 紀伊國屋書店.)

[14] Humphrey, N., (2011). *Soul Dust: The Magic of Consciousness*, Princeton: Princeton University Press. (柴田裕之 (訳), (2012). 『ソウルダスト――〈意識〉という魅惑の幻想』, 紀伊國屋書店.)

[15] Humphrey, N., (2000). “In reply”, *Journal of Consciousness Studies* Vol. 7, Iss. 4, pp. 98-125.